
ウィダ ～世界を左右する者～

黒崎 桜樺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウイダ ～世界を左右する者～

【Nコード】

N8967Z

【作者名】

黒崎 桜樺

【あらすじ】

剣と魔法が支配する異世界フォース
魔族、ヴァンパイア、ドラゴン、エルフ、人間いろいろな種族が交わることなく生きている。

ウイダは、親が死んだから孤児院で育った。

そう思っていたウイダだが孤児院長 マルスから

‘お前の親は多分生きている’と14歳の誕生日に言われる。

親に会ってみたいと、ウイダは孤児院を抜け出し

親探しの壮絶な旅が始まる

魔法・剣たくさん出てきますよ*、（）

始まり

「お前ら弱いな」

目の前で伸びている男どもに少年は言った。

おいおい少年と言っていいガキが大の大人を相手にしちゃったよ・

俺の生きてる世界って狭かったんだな、今年で53歳にもなるのに

店主のアルズは思った。

「なあ店主、冒険者ってどうやってなるんだ？」

顔を上げてみると、黒髪紅目の美少年がいた。

紅目つてめずらしいな、つーかどこぞの王子だよ、無駄にキラキラしやがって

少年は身長175cmぐらいか、無駄な肉が付いていないすらりとした体、長い手足、腰には剣がある、あまりにも顔が綺麗なので少女が一度は夢みる王子様といった感じた。

けれど、それを裏切るかのごとく服は年季が入っているのが一目でわかる。

つまりボロイ。

剣を売れば金になるだろうに、おしいなコイツと、物思いにふけて

「おい、聞いてなかったのかよ。どうやったら冒険者になれるんだ？」

「あー、悪い悪い。お前さん冒険者になりたいのか？」

この少年なら、冒険者になるより舞台役者になってもなつたほうが儲かりそうな気がするが・・・

「当たり前だろ、だから聞いているんだろっ！」

少年が怒りをあらわにする。

「やめとけ、やめとけお前さんみたいな美少年の顔に傷ができたら、ご婦人方が悲しむ」

「はっ！何いってんだ店主」

馬鹿にしたように俺を見る、ぶん殴ってやろうか

「おい！こっちは心配して言ってるんだ。何馬鹿にしたように俺のと見てんだ！それと俺のことは、アルズと呼べ、美少年」

「俺は、そこらにいる雑魚よりは強い自信がある！」

胸をはって言う

「それに、美少年、美少年ってうるせーんだよ！俺にはウィダって名前があるんだよアルズ！」

そうか、こいつの名前ウィダって言うのか。

それに、「そこらにいる雑魚よりも強い自信がある」とはよく言ったものだ。

まあ、ここは俺が世の中の敵しさつてもんを教えてう

「で、冒険者つてどうやってなるんだ？」

「おいおいウイダ、タダで教えるはずないだろ」

「ちっ、なにすりゃいいんだ。言っとくが金は持ってないからな」

「そんなん、見ればわかる。あの男を倒したら教えてやらないまでもない」

と、店の中で一番騒いでいる男を指差す。男の周りには仲間が8人いる。

強面の顔つきで背もウイダよりも高いだろう

まあ、倒せんだろうがな、これでウイダは世の中の敵しさつてもんが分かるだろう。

もし倒せたとしても男の仲間にはやられるだろうが・・・
けれど、ウイダは臆することなく分かったといい指差した男に向かっていった。

「おい、お前、恨みはないが俺と勝負してくれ！」

あまりにも、正々堂々と言い放つ。

お前馬鹿かとゆうように一瞬で店の中が静かになる。

怯えているわけではなく、ウイダが倒されるのを楽しみにしているのだ。

今か、今かと。

「よっしゃー。勝負だ小僧」

いき良いおく立ち上がる男

「加減しろよ。デイル俺らはBランクなんだからな！」

仲間が声をかけ、店の中も騒がしくなる

どうやら冒険者だったらしい、ランクというのは強さの基準だ。

一ランク、一ランクの差は馬鹿にならないほどあり、一般の者はCランクである、

Bランクとゆうことは相当強い。

こりゃ、絶対に勝てんな

と思っていたら一瞬で勝負が終わった。

デイルがウィダに向かって突っ込んでいった。

すると、ウィダは慌てる様子も無く、左に避け、右足を軸に勢い良く一回転。

まだ、体勢を戻しきれしていないデイルに蹴りを入れる。

腹に蹴りをくらいデイルは5mほど吹っ飛び壁にぶち当たった。

泡を吹いて倒れた。

店の中が一気に静かになる。

ウィダが倒されると皆思ってたので無理は無い。

啞然とする仲間たち。

しかし、それもつかの間、デイルををやられて仲間は、黙っていなかった。

「この野郎！！」

一斉にウィダに突っ込んで行く。

8人が一斉に自分に向かって来ても焦っていないようだ。

「うるさい、雑魚は黙っとけ!!」

ウイダは容赦なく言った。

8回ゴトツと音がした。

8人の男たちは床に倒れてる。

ウイダがいた場所から動いていなかったら、ウイダがやったと誰もわからなかっただろう。

そう、まさに瞬きした瞬間には男たちが倒れていた、とゆう状況だった。

当の本人は涼しい顔をしながら残念そうに

「お前ら弱いな」

文句のように言う。

そして、ウイダが振り向き

「それで、どうやって冒険者になるんだ？」

始まり（後書き）

いかがでしたか？

初めて書いた作品なのでまだまだ物足りないかと思いますが
応援お願いします

評価、コメントよければお願いします

冒険者ギルド（上）

おいおい、とんでもない奴だな。

Bランクの冒険者9人倒しちまったぞ！！！！

店の中はまたもや呆然・・・

そりゃそうだろ、まだ人生の厳しさってもんを分かってないようなガキだぞ！

しかも、まだ冒険者じゃないときた。

客たちは、放心状態から戻り始め口々に

「お前すっげーな」「おりゃ、あんな戦い始めてみたぞ！」

と、騒ぎ始める。無理もないだろう。

ウィダは、ただ不思議そうに今自分が倒した男たちを見ている。

まるで、俺こんなことできたっけと思っていそうな顔つきだ。

客たちは、ずっと騒ぎそうな勢いで騒いでおり、はつきり言っているのか聞き取ることができない状況だ。

「おい」

静かにウィダは言葉を発する。

さほど大きな声で言ったわけではないのだが皆が静かになる。

そう、ウィダの有無を言わせないプレッシャーを感じとったのだ。そして、静かに

「お前が言ったとつりに倒したぞ。早く教えろ」

アルズはプレッシャーに押しつぶされあそびになりながら

「こ、この町で・・・一番大きな建物がある。そこが冒険者ギルドだ。中に入ったら誰かに声をかければ、分かるだろう・・・」

「なんだ、そんなに簡単なのか」

それだけ聞くとウイダは店を出て行った。

ウイダの背中を見ながらアルズは思う。

アイツ・・・ウイダは、必ずやこの国にいや大陸中に名を轟かぞ
-
-
-

一息ついて思い出した・・・こいつらどうしようか・・・と、倒れた男たちに目をむけるのだった。

はあ、世の中って厳しいな・・・
外に出たウイダは思うのだった。

強がって、倒せるみたいなこと言ってしまったが内心ドキドキしま
つくっていた。

そう、ウイダにとって勝負は初めてだった。

ウイダが育った孤児院は小さな村にあり、若い男たちは街に稼ぎに
行くと言う風習がある。

なので村には、老人や女、子供だけが残っていた。

そのせいか、皆親がないウイダにも優しく接してくれ、勝負など
することがない。

一度まだ4、5歳のときに友達と遊んでいるうちに、喧嘩になるこ
とはあった。

そのときは、その子を思いっきり叩いたら伸びてしまい、孤児院長
のマルスにこつぴどく叱られたっけ

それから喧嘩にならないように気おつけてきた。

だから、久々に全力で戦った。

あまりにもあつさり勝ってしまい、ついつい本音がでてしまった。

「お前ら弱いな」っと・・・

街では、タダで教えてくれないものなのか！？
不親切なところだと、歩きながら思う。

そういえば、ギルドに行かなくては・・・金がない

この街レニースは大きな街だがそう大きな建物はそう多くは無いの
で簡単に見つかるだろう。

.....20分後ようやく街で一番大きな建物の前に到着した。

本当にでかい孤児院が3つぐらいはいるのではないか？

俺はここから始めるんだ・・・そして必ず会って見せる
期待に胸を高鳴らせ冒険者ギルドに足を踏み入れた。

冒険者ギルド(上)(後書き)

どうでしたか？

感想・評価をいただけると嬉しいです。

誤字脱字がありましたらご報告お願いします。

冒険者ギルド

そこは、イメージしていたのとは違った、すみずみまで整理整頓されていた。

一つだけイメージとあっていたのは、強そうな冒険者がおり、騒がしいことだった。

入って右側には受付があり、部屋の中央には掲示板が設置されている。

ギルドの入り口で止まっていると金髪蒼眼の女性が声をかけてきた。

「あの〜、どうされましたか？」

「登録したいんですが」

「登録ですね。付いて来て下さい」

彼女のあとについていき部屋にとうされた。

そこはテーブルとソファ、テーブルの上には水晶玉が置いてあった。

ソファに座ると

「私は、ギルドで働いているマリアです」

「ウイダだ、敬語はいらさないから」

「そうですね・・・？じゃあ、ウイダヨロシクネ！！」

「よろしく」

マリアが手を出してきたのでウイダも手を出し握手をした。

握手を終え

「ギルドの説明をするね」

「ああ、おねがい」

「冒険者にはランクが上からS・A・B・C・D・E・Fの7段階あつて、ランクを上げるには、自分のランクを20件依頼を受けるか、1つ上のランクを5件、2つ上を1件やれば、上がるけど、実力があればギルドから伝達が来て一気にランクアップするよ！ここまでで質問はある？」

「受けるランクは、制限ある？」

「えーと、安全面、依頼達成率を上げるために2つ上までつて決まってる」

「そっか」

「次は、この

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8967z/>

ウィダ ~世界を左右する者~

2012年1月15日02時47分発行